平成２６年度

第８回石川県高等学校体育連盟研究大会

研　究　紀　要

主催　　石　川　県　高　等　学　校　体　育　連　盟

あ　い　さ　つ

石川県高等学校体育連盟
調査研究部長　江　指　　肇

石川県高等学校体育連盟研究紀要第７号の発刊にあたり、ご尽力いただきました関係各位に深く感謝いたします。

さて、今年度は東京都を中心開催県とし、『煌めく青春　南関東総体２０１４』が盛大に開催されました。また、国民体育大会は長崎県で、『長崎がんばらんば国体』の開催でした。本県の高校生達は、インターハイ・国体の相撲団体での優勝をはじめ、各種目で昨年以上の活躍をしてくれました。さらには、星稜高校サッカー部が第９３回全国高校サッカー選手権大会で見事な優勝を成しえました。２０２０年『東京でオリンピック』に、本県出身者が活躍してくれる基礎ができつつある一年であったと思います。

一方、全国高体連研究大会は徳島県で開催され、課題研究、各分科会で優秀な研究発表が行われました。来年度の宮城大会では、「競技力の向上」の分科会で、カヌー専門部の小松商業高等学校松田岳志先生がカヌー石川の指導法を伝える予定です。どうぞよろしくお願いします。

県内事業では、平成２６年１１月に第８回石川県高等学校体育連盟研究大会を青少年研修センターで開催しました。各専門部、各高等学校のご協力により、約 100 名の参加をいただき、４専門部（バドミントン・馬術・スキー・ライフル射撃）の発表が行われました。それぞれ内容の濃い発表で、他の専門部でも生かしていただければ幸いに思います。発表された専門部・先生方ありがとうございました。

最後に、平成２８年度の第１０回県研究大会で、専門部の研究発表が一巡し、新たな方向性が求められているところでありますが、石川県高等学校体育連盟が活性化することが大切な事でありますので、今後とも関係各位にさらなるお願いをいたします。

平成２６年度　第８回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

１　目　　的　　石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育･スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。

２　主　　催　　石川県高等学校体育連盟

３　日　　時　　平成２６年１１月２５日（火）　１４：００～１６：００

４　会　　場　　石川県青少年総合研修センター
　金沢市常盤町２１２－１　　ＴＥＬ 076-252-0666

５　参加対象　　石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者

６　研究主題　　It’s time for action.（今こそやるときだ！）
　～スポーツがひらく輝く未来～

７　内　　容　　研究発表

「頂点を目指して」
　　～選手強化と周囲からの支援～
　発表者　　バドミントン専門部
　　金沢向陽高等学校　　車　　浩明　教諭

「石川県馬術の普及・発展を目指して」
　発表者　　馬術専門部
　　金沢向陽高等学校　　中川　義之　教諭

「トップへの挑戦」
　　～速さを考えた一貫性のある指導体制～
　発表者　　スキー専門部
　　鶴来高等学校　　櫻井　外郷　教諭

「ライフル射撃の発展と競技力向上のために」
　発表者　　ライフル射撃専門部
　　金沢辰巳丘高等学校　　田村　　達　教諭

８　日　　程

13:30	14:00~	14:10~	15:40~	15:55~
受付	開会式	研究発表	質疑応答	指導助言	閉会式

第8回県研究大会参加者名簿

	学校名	氏名			
1	大聖寺実	西田　京美			
2	加賀聖城	吉田　有紀			
3	大聖寺	長谷川　徹			
4	加賀	林　文夫			
5	小松商業	山作　直弘	村永　美千代	松田　岳志	
6	小松工業	元尾　武彦	島屋　豊		
7	小松市立	浅田　崇一	山本　伸忠		
8	小松	吉田　洋	安田　誠二	矢田　英	
9	小松北	瀬川　隆司			
10	小松明峰	野田　誠一	高田　哲洋		
11	寺井	達　光洋			
12	鶴来	櫻井　外郷			
13	松任	山口　賢一	西垣　仁志		
14	翠星	中村　建哉	根石　修		
15	野々市明倫	平川　典生	川崎　克也	山田　進	
16	金沢錦丘	角橋　茂則	小原　一顕		
17	金沢泉丘	稲葉　梨絵	近岡　岳則	青木　崇	
18	金沢二水	野村　いずみ			
19	金沢中央	中川　太	中村　司		
20	金沢伏見	佐々木　明	千石　友規	今川　徹	
21	金沢辰巳丘	田村　達	井波　真祐		
22	金沢商業	北村　由美	北村　浩之		
23	県立工業	小林　裕一	大塚　正則		
24	金沢桜丘	寺西　了	釜田　渉	松本　雅光	小田　哲生
25	金市工業	中村　哲夫			
26	金沢西	勝二　国博	吉田　浩昭		
27	金沢北陵	波佐間　英之			
28	金沢向陽	山首　一恵	中川　義之	車　浩明	
29	内灘	守屋　英樹	福井　有澄		
30	津幡	西村　剛	中村　篤		
31	宝達	稲田　秀幸			
32	羽咋	山岸　亜矢			
33	羽松	三嶋　美和子			
34	羽咋工業	中越　顕治	安達　祥光		
35	志賀	倉脇　寛支			
36	鹿西	本橋　克也			
37	七尾東雲	赤穂　真			
38	七尾	黒坂　昭弘	和田　真		
39	七尾城北	白藤　金一			
40	田鶴浜	得田　尚希			
41	穴水	坂下　貴幸			
42	門前	武田　航			
43	輪島	小杉　央子			
44	能登	大屋　省吾	高塚　雅和		
45	飯田	嶽　桂輔			
46	ろう学校	片山　敏弘			
47	明和特支	松井　遼			
48	いしかわ特支	北村　欣也			
49	金大附属	藤田　久美子			
50	小松大谷	岡部　さと志	中村　隆輔		
51	北陸学院	徳山　慧	宮田　佳恵		
52	遊学館	中田　浩文			
53	金沢	波佐間　美樹	日吉　正		
54	尾山台	星野　仁孝			
55	星稜	桜井　亮士	米田　光利		
56	金沢学院東	山本　裕太			
57	鵬学園	藤井　繁			
58	日本航空石川	田辺　和文	南　健介		

94名

「頂点を目指して」
　～選手強化と周囲から支援～

石川県立金沢向陽高等学校
バドミントン部　顧問　車　浩明

１．はじめに

　バドミントンは以前、あまりメジャーではスポーツではなかった。しかし、１９９２年のバルセロナオリンピックの正式種目に採用され、その後小椋・潮田（オグシオ）で注目を浴びるようになった。北京オリンピックでは末綱・前田（スエマエ）が４位入賞を果たした。ロンドンオリンピックでは藤井・垣岩（フジカキ）が銀メダルを獲得した。本年度国別対抗戦の男子トマス杯では初優勝、女子ユーバー杯では準優勝という結果を残した。またアジア大会に高校生が出場するなどバドミントンに注目され、かつ競技力も向上してきている。石川県は以前からバドミントン王国といわれてきた。数多くの日本チャンピオンがでている。高校においても全国で優勝や上位に進出する学校は多くあった。本校バドミントン部は１９７３年創部された。どちらといえば後発であり、全国で活躍する学校を追い越せという気持ちで前監督である和田修先生が発足した。たくさんの苦労があったと思われるが、私が本校に赴任して１１年になるが、何年間か一緒に指導させて頂いた中、全国の強豪と呼ばれ、それを継続している学校になる理由などを感じた。また、それだけではなく自分なり継続する中で、さらなる向上を目指し、全国の頂点に立てるような工夫も行ってきた。そのほかにたくさんの周囲からの支援も頂いた。強化費や練習相手など様々な形ではあるがこういうことにも感謝したい。

　私が全国の頂点を目指す上での考えや行ってきたことをお伝えし少しでも参考になればと思う。

〇練習時間　　朝練習　７：２０～８：２０　　基本練習
　　平日　　１５：４５～１８：４５　応用練習・ゲーム練習
　　土日　　９：００～１２：３０　　応用練習・ゲーム練習
　　合宿　　夏休み・冬休みとも４泊５日で行う
　　試合の翌日やテスト時期、年末年始などは休み
〇部員　　３年　１名・２年　７名・１年　６名
〇近年過去５年間の実績
Ｈ２６年度　全国高校総体　団体３位　　県高校総体　団体優勝　２７年連続
　　国体　　少年女子５位　　ジュニアオリンピックカップ　ダブルス２位　シングルス３位
Ｈ２５年度　全国高校総体　シングルス、ダブルスベスト８　　県高校総体　団体優勝
Ｈ２４年度　全国高校総体　ダブルス優勝　　県高校総体　団体優勝　　国体　少年女子４位
　　全国選抜　シングルス優勝　ダブルス３位
Ｈ２３年度　全国高校総体　シングルス３位　団体ベスト８　県高校総体　団体優勝　国体　少年女子３位
Ｈ２２年度　全国高校総体　団体ベスト８　ダブルスベスト８

２．指導方針（チームを強くするために必要なこと）

・人の育成

スポーツマンとして、高校生として、人間性を育成する

（１）挨拶、返事、声の大きさ

　部活動をする者として、大きな声で挨拶をする、返事をするというのは基本的なことである。また、人に自分の意志を伝えるときには大きな声ではきはきと答える必要がある。バドミントンはネットを挟んで対戦する行う競技である。ゲーム中には自分の気持ちを高めるために声を出す。その声が相手に伝わなければい

けない。また、声は相手への意志や気持ちを伝えるものである。その声が出せなければ試合に勝てる選手にはならない。そして、いろいろな会場での雰囲気に声の出せない選手はのまれてしまう。そのためにも、日頃から声を出し意思表示をすることが勝つことの第一歩であるとおもう。

（２）見本となる学校生活

部活動をするもの、そして全国大会など活躍するような者は他の生徒の見本とならなければいけない。選手である前に一高校生である。授業においても、日頃の学校生活において常に一生懸命に取組、周囲から認めてもらえるような人間にならなければいけない。そうすることによって周囲が応援をしてくれ、その力が試合において大事な場面において予想以上の力が発揮される。部員として誰が見ているかわからない。周囲の楽な方に流されず、常に緊張感をもって行動するよう指導をしている。

（３）環境の整備

練習をする上で環境が整っていないといけない。しかし、自分たちだけでは整備できない。指導者、練習場所、練習用具、練習相手など環境が整っていないと強化をはかることができない。様々な所からの協力があってこのような環境が整備できる。練習相手も現在は一般の方がたくさんの方が土日の休みを利用して指導してくれる。また、大学生がスパーリングの相手となってくれる環境が整ってきている。それが強化につながっている。

（４）目標の設定

本校は全国での団体優勝を目標としている。団体戦は、選抜大会、インターハイ、国体の順にありそれぞれで目標を立てる。この目標を、指導者だけがもち、選手がもっていなければ意味がない。お互いに全国大会での優勝を最終目標として共有しなければいけない。そして選手達にはその最終目標を達成するためにチームとして個々として何をしなければいけないのかを考えさせる。また、一週間、一ヶ月後にどういう選手になりたいのかという短期的目標、次の大会での結果や１年後にどういう選手になりたいのか中期的目標をチームの一員として個人の選手としてという形で立てさせる。その目標についての具体的な方策を考えノートに書き、いつでも見ることが出来る状況にしておく。そして目標が達成されれば次のレベルの目標を設定するという形で進めている。また、その目標を書いてあるノートには練習などいわれたアドバイスを書くようにさせている。練習中にその書く時間をとるわけではないが、練習後や帰宅してからなどに練習について考えさせている。そして、そのノートを練習前に再度見なおす指導をしている。そして、前日までにいわれたアドバイスができればその部分をチェックするという作業もさせている。書きっぱなしではなく、それをみて自分でチェックすることも大切であると思う。また、その様々なこと書きとめたノートは自分の財産になってくる。あのときの言葉などから自分が出来なかったことができるようになっていると感じ、それが自信につながることもある。

（５）技術の向上

本校は朝練習の時間を活用して基本練習を行っている。基本練習も出来るだけ実践に近いような形で行うようにしている。いろいろなストローク、フライトがあるが、ただ時間を使って打ち合いを行い、自己満足の練習では試合には通用しないであろう。そこで、一つのことを練習するにしてもコースを打ち分けることや構え、フットワークなど様々ことをイメージさせるようにする。試合ではどのようなショットが来るか分からないのだから、パターンといえどもいろいろなことを考えさせる。また、ミスをしないようにすることなど基本的なこともおさえることも必要であると思う。

その朝練習での基本練習を応用し、放課後の練習を行う。放課後の練習ではより実践に近い練習をおこな

う。ノックや２対１、またゲームなどを行う。朝練習の基本がしっかり出来ていないとゲームに近い練習をしても力が発揮できないということがある。また、基本練習では出来るのにゲーム練習などにおいて基本時に実践を意識できていないためか出来ないという選手もいる。そのような選手の意識や考え方を変えることは容易なことではないがそれを修正するのは指導者としての役目であると思う。

そして、土日はさらに実践に近く、先に述べたように大学生や社会人、一般の人などを練習相手にゲーム練習を行う。特に本校は男子と練習する場合が多い。これは、自分より強い相手を行わなければいけない。その相手に自分が練習してきたことを発揮し、勝とうという気持ちを持って臨む。それが本番の試合につながる。男子だから勝てないというあきらめを持つのではなく、一点でも一セットでもそして一勝でもできるようにということで行わせている。そして試合直後にアドバイスをもらう。実際にゲームした相手からもらうアドバイスは指導者と同じようなこといわれていても新鮮みがあり、それがきっかけで出来るようになるということもある。そのような場面を数多くつくることによって成長が見られる。

練習の内容も一つ一つが単一のものではく、基本から応用、そしてゲーム、最後に本番というように連動性を持たさなければ意味がないとおもう。

（６）自分で考える

私の指導の方針としてはできるだけ生徒の考えさせるようにしている。アドバイスに関しても１から１０まで全部話をするわけでなく、１から５のこと話をして、自分で考えさせるようにしている。全部を強制してしまうと、いざというときに対応できない。試合において、どのような状況でどのような試合運びになるか分からない。それに対して瞬時に考え判断できるようにしなければいけない。また、指導者の考えはあるがそれが全部その選手にあてはまるとも限らない。だから、考えて自分のものにする対応力をつけなければいけない。しかし、まったく間違ったことをしていれば１０を話して是正しなければいけないであろう。瞬時に考え判断できる選手、それが試合においても常日頃の生活においても対応できるようになると思う。

（７）感謝・謙虚さを忘れない

選手には常に感謝の気持ちをもって練習するように指導している。シャトルがある、体育館がある、指導者がいる、練習相手がいる、用具がそろうなど様々な面において感謝しなければいけない。学校、保護者、仲間などたくさんの支えがあるから何不自由なく練習が出来るのである。この気持ちを忘れて、謙虚さがなくなった選手は絶対に頂点に立つことは出来ないし、誰からも応援されなくなると指導をしている。自分自身もこれを忘れずに日頃取り組むようにしている。

３．支援（様々な形での本校バドミントン部への応援）

・強くなるためには自分たちの力だけではむずかしい。様々な支援があるから強くなれると考える。

（１）学校からの支援

学校からは様々な形で支援をしてもらっている。部費に始まり、遠征費、体育館など挙げればきりがないくらいである。このような学校がバックアップをしてくれ、理解をしてくれるからこそ十分な練習が出来るわけである。

（２）保護者からの支援

合宿や遠征などで金銭的に係る場合がある。また、インターハイ・選抜大会においても全員で臨むというスタイルをずっと続けている。これもお金のかかることである。これに対して保護者に説明をした上で理解をしてもらい負担をしてもらっている。また、朝練習があり朝ご飯を食べることがはやくなり、その上お弁当作成し、帰宅したら夕食がある。それも、選手の栄養のバランスを考えて調理されており大変感謝して

いる。このような保護者からの支援があって活動が出来るのである。

（３）高体連からの支援

向陽高校に赴任してから県高体連より強化費という多大なる支援を頂いている。バドミントンをすることは非常にお金のかかることである。この強化費というのは大変ありがたいものである。この高体連からの支援をして頂いていることで満足な練習が出来ていることもある。また、実業団のトップチームよんで指導を受けるための強化に当てさせてもらっている。選手は自分があこがれる選手からの指導を受けることができ、そして、その選手とゲーム練習ができるという恵まれた環境にある。このような強化や事業が出来るのは高体連からの支援であるからであり、この場を借りて感謝を申し上げたい。

（４）石川県バドミントン協会からの支援

県協会からも強化のためのシャトルの補助やスパーリングパートナーの派遣、県外遠征、国体県内強化練習などたくさんの練習環境を与えもらったりしている。シャトルに関しては多くの補助も頂いているし、全国大会の前には男子の練習相手を派遣してくれるため中身の濃い練習を行う事が出来る。

（５）上記以外の人たちの支援

本校の練習には本当にたくさんの人が来てくれる。その人達は選手のことを考えいろいろなアドバイスをくれる。これも非常にありがたいことである。こういう人たちの支援があるから選手の強化あると思う。

４．さいごに

本校の練習時間は全国の強豪校に比べ非常に短い。しかし、そのスタイルを変えずにいままで全国の強豪と勝負をしてきた。いままで述べたこと毎日の練習で続けて行うと身体的も精神的にもくたくたになってしまう。それもあり、本校は短期集中というかたちで練習を行っている。また、【日々努力　継続は力なり】というのが部訓であり体育館にかかげられている。生徒はこの部訓を毎日見ながら練習に取り組んでいるのである。

本校のバドミントン部は全国選抜大会、国体で２度団体優勝している。個人戦においては選抜大会、インターハイにおいて優勝をしているが、インターハイの団体の優勝だけがまだない。準優勝は何度かしているが優勝は悲願である。この悲願に向け、今まで述べたことを継続し、さらに磨きをかけ日々練習に取り組んでいきたい。

「石川県馬術の普及・発展を目指して」

馬術専門部
金沢向陽高等学校　中川　義之

１．はじめに　―　人間と「馬」との歴史的関わり　―

人間が「馬」に乗る最大の目的は移動のためであった。20 世紀前半に自動車に取って代わられるまでは陸上における個人の移動手段の筆頭であった。次に機動性を活かした役務の提供として軍馬として従軍、また、カウボーイに見られるように牧畜にも利用された。乗用以外にも現代ならばトラクターに該当する農耕機具としての役割も果たし、人間生活に必要不可欠な存在であった。

２．馬術競技とは

馬術競技は、人と生き物である馬とが一体となって競技を行うスポーツで、オリンピックでは男性と女性が同じステージで戦う唯一の種目である。また、幅広い年齢層の選手が活躍している種目でもある。それはなぜだろうか。

馬術競技においては、運動するエネルギーは馬の役割で、そのためのリズムとバランスを与えるのが選手の役割である。選手は経験を重ねるごとにその感覚を研ぎ澄まし、より緻密な扶助（馬への合図）を出せるようになる。そのため、他のスポーツにおいてはトップアスリートとして活躍できる年齢を過ぎても、馬術競技では馬が体力面をカバーしてくれるため、60 歳を過ぎても第一線で活動を続けている選手が多いのである。定年退職後に再び真剣に競技に取り組み、北京・ロンドンオリンピックに連続出場を果たした法華津選手の活躍が記憶に新しいところである。まさに生涯スポーツとしての魅力を有している。同様に、体力面では男性にかなわない女性であっても、馬との信頼関係を築き、馬に正しく指示することができれば、互角に勝負することができるのも魅力の一つである。

３．馬術競技の歴史・分類

紀元前 680 年に古代オリンピックで４頭立ての戦車競争が行われたのが最初で、19 世紀に近代馬術の基礎が確立し、オリンピックでは 1900 年の第２回パリ大会から正式競技となる。現代のオリンピック競技では演技の正確さや人馬一体の美しさを競う「馬場馬術」、競技場に設置された様々な色や形の障害物を、決められた順番通りに飛越・走行しながらミスなく早くゴールできるかを競う「障害馬術」、これら２種目にクロスカントリー種目を加えた３種目を同じ人馬で戦い抜く「総合馬術」の３種目がそれぞれ個人と団体で争われ計６種目が実施されている。

（１）　近代オリンピックにおける馬術競技

1900 年の第２回パリ大会で初めて実施され、1904、1908 年は実施が見送られたが、1912 年ストックホルム大会で再び実施され、現在に至る。金メダルの獲得数は多い順にドイツ、スウェーデン、フランス、旧西ドイツ、アメリカとなっており、欧米諸国が圧倒的に強いのが現状である。

（２）　日本選手のオリンピックでの成績

1932 年ロサンゼルス大会で西　竹一選手が障害飛越競技個人で金メダルを獲得している。他に特筆すべき成績として 1992 年バルセロナ大会総合馬術競技団体で７位入賞を果たしている。

（３）　馬術競技の分類

①　ブリティッシュ馬術

ヨーロッパ発祥の馬術であり、運動の正確さ・美しさを重視する。礼儀・作法も重んじており、公式大会では正装を義務づけられている。オリンピックをはじめとした公式の馬術競技種目はブリティッシュ馬術に由来

している。

② ウェスタン馬術

西部開拓時代において長距離の騎乗を行うことを目的としたカウボーイ乗馬に端を発する馬術である。服装もカウボーイハット、ジーンズ、ウェスタンブーツとウェスタンファッションが正装である。

③ 伝統日本馬術

日本での馬術は武芸十八般にも数えられているように中世の武士にとって必須科目であった。競技種目として流鏑馬・笠懸・打毬などがある。しかし、江戸時代以降、天下泰平の世を謳歌するに伴い廃れていった。明治以降、伝統の馬術を廃して西洋馬術を大日本帝国陸軍に導入した。そのため、現在も用語の多くに軍隊時代の名残が少なからず見受けられる。

４．日本における馬術の現状

1946 年に発足した公益社団法人日本馬術連盟（以下日馬連）は各都道府県馬術連盟を基盤として、全日本学生馬術連盟、全日本高等学校馬術連盟（以下高馬連）、日本乗馬少年団連盟、日本社会人団体馬術連盟を組成団体として構成されている。日本の乗馬人口の裾野の大半は各都道府県馬術連盟に加盟している公益または民間の乗馬クラブ会員が占めている。2009 年調査での日本における乗馬人口（馬術部含まず）は約７万人、イギリスでは 240 万人、フランスでは 150 万人ということからも欧米に比べていかにマイナースポーツなのかが分かる。生活事情、住宅事情の反映であろうか。欧米では庭先で子供用にポニーを飼うという光景が決して珍しくないようである。なお、日馬連に登録した純粋な競技人口は更に少なく、前述の人口の 10%である約 7000 人にとどまっている。また、高校馬術競技は貸与馬で行い、北信越大会やインターハイに出場する際には馬を会場まで運搬する必要がなく、会場の所有する馬に騎乗して競技に臨むことになる。高馬連は全国高体連に加盟していないため、インターハイの開催時期・開催地は他の競技とは異なり、７月下旬に団体戦、９月上旬に個人戦が開催される。近年では会場が固定化されつつあり、団体戦は静岡県御殿場市馬術・スポーツセンターで６年連続、個人戦は第１回大会以来、現在まで東京のＪＲＡ馬事公苑で開催されている。

５．石川県の馬術の現状

本県における馬術の練習は石川県馬事公苑（以下県馬事公苑）、ヴィテン乗馬クラブクレイン金沢（以下クレイン）及び金沢大学馬術部の３ヶ所で各々日々の練習を行っている。ただし、高校生の場合、馬事公苑とクレインに限定される。

（１）石川県馬術連盟の略式年表

昭和	主な出来事
22	石川県馬術連盟発足　第２回国体を金沢市入江「金沢競馬場」（現高岡中学）で開催
24	金沢大学馬術部創部
25	金沢高師附属高校、金沢泉丘高校、金沢二水高校、松任農業高校に馬術部創部
40	金沢二水高校に厩舎完成（金沢市長坂町）（現長坂台小学校グラウンド）
同	金沢大学馬術部厩舎が旧城址内から平和町に移転（現附属小学校）
48	県馬事公苑開苑
49	金沢乗馬スポーツ少年団結成（於馬事公苑）
平成	
3	第 46 回石川国体（於馬事公苑）
5	金沢大学馬術部が角間町へ移転
9	県馬事公苑新管理棟完成

（２） 当専門部の歩み

当専門部は昭和 57 年に県高体連に加盟した。第１回の県高校総体には団体戦は金沢二水、金沢向陽、個人戦は金沢女子（現金沢伏見）、北陸学院、北陸大谷（現小松大谷）、金沢泉丘、松陵工業（現金沢北陵）、金沢商業、松任農業（現翠星）の計９校が参加して行われた。選手の大半は金沢乗馬スポーツ少年団員でもあるため、高校入学前からの経験者であった。当然、金沢二水・金沢向陽以外は部や同好会が存在しなかったため、個人参加であったことは容易に想像できる。以後、両校以外に少人数の選手が様々な学校に点在し、現在に至っている。平成７年度には金沢高校、18 年度には金大附属に創部されたが、後に続く部員がいなかったため、現在は廃部となっている。

昭和	主な出来事
57	県高体連に加盟　第１回県高校総体・県新人大会実施
同	金沢向陽に乗馬同好会発足
60	第 19 回全日本高等学校馬術競技大会（団体戦）開催（於県馬事公苑）
同	金沢向陽に馬術部創部（同好会からの昇格）
63	第 22 回全日本高等学校馬術競技大会（団体戦）で金沢二水が準優勝
平成	
元	第８回日韓高校馬術大会開催（於県馬事公苑）
３	石川国体　少年ダービー競技（個人戦）　優勝（金沢向陽）
同	石川国体　少年トップスコア競技（個人戦）　優勝（金沢向陽）
７	金沢高校に馬術部創部
同	第６回全日本高等学校馬術競技大会（個人戦）　準優勝（金沢向陽）
18	金大附属に馬術部創部

（３） 近 10 年の競技成績（全国大会入賞の記録）

平成	競技成績
17	国体　少年団体障害飛越競技　第６位　（金沢向陽）（金大附属）
同	国体　少年リレー競技（２人１チーム戦）　第６位　（金沢向陽）（金大附属）
18	国体　少年二段階障害飛越競技（個人戦）　第５位　（金大附属）
19	国体　少年団体障害飛越競技　優勝　（金大附属）（金沢向陽）（北陸学院）
同	国体　少年標準障害飛越競技　第５位　（金大附属）
20	国体　少年ダービー競技　第４位　（遊学館）
21	国体　少年リレー競技（２人１チーム戦）　第３位　（北陸学院）（金沢向陽）
22	国体　少年二段階障害飛越競技（個人戦）　第８位　（金沢向陽）
25	国体　少年団体障害飛越競技　第３位　（金沢向陽）（金沢西）
同	国体　少年個人障害飛越競技　第６位、第８位　（いずれも金沢向陽）

（４）近 10 年の個人参加校

平成	学校名	男子	女子	所属乗馬クラブ
17	金沢	1	0	クレイン
同	金大附属	1	0	県馬事公苑
18	金沢	1	0	クレイン
同	金大附属	2	0	県馬事公苑・クレイン
同	遊学館	1	0	クレイン
19	金大附属	2	0	県馬事公苑・クレイン
同	遊学館	1	1	クレイン
同	北陸学院	0	1	県馬事公苑
20	金大附属	1	0	クレイン
同	遊学館	0	1	クレイン
同	北陸学院	0	1	県馬事公苑
21	遊学館	0	2	県馬事公苑・クレイン
同	北陸学院	0	1	県馬事公苑
22	遊学館	1	1	県馬事公苑・クレイン
23	遊学館	1	1	県馬事公苑・クレイン
同	金沢西	1	0	立山乗馬クラブ
24	遊学館	1	0	クレイン
同	金沢西	1	0	立山乗馬クラブ
25	金沢西	1	0	立山乗馬クラブ
同	星稜	0	1	クレイン
26	星稜	0	1	クレイン

６．普及に向けて

（１）他県の事例から

―高知県立幡多農業高校　「馬術」不毛の地での戦い―（高体連ジャーナル 21 号より要約して抜粋）

砂場かと思うほど狭い馬場とわずか１名の女子部員という過酷な状況の中で先輩たちが作り上げてきた部を潰すわけにはいかないと必死に活動する部員の姿を見て、生徒の気持ちに応えられる指導者になろうと顧問が一念発起したことから全ては始まる。同校馬術部が継続的に活動していくためにまずは部員確保に奔走した。具体的には「馬」という魅力的な動物を多くの人に知ってもらう活動を練習や競技会の合間を見て積極的に行った。例えば同県四万十市や三原村など地域の祭りや行列などの行事に参加して存在をアピールした。その結果、徐々に地域から注目されるようになり、現在では求められるものとなった。生徒の取り組む姿勢や練習態度が改善し、部員も年々増加していった。また、同校馬術部では生徒以外の小学生・中学生を対象とした少年団を受け入れ、休日に一緒に活動している。小・中学生から育成をして将来有望な選手を確保する活動を行っている。

（２）当専門部の今後の取り組み

当専門部は発足した当初から県馬事公苑の金沢乗馬スポーツ少年団と密接な関係があり、前述のように各々の少年団員が進学した高校から大会に参加していた。しかし、少子化の影響からか少年団員が減少傾向にあり、経験者よりも初心者が入部するケースが目立ってきた。今年度は金沢二水が 10 名（男子０　女子 10）、金沢

向陽が 12 名（男子２　女子 10）と、近年まれにみる部員数で活気にあふれている。急増した原因を分析したところ、金沢向陽の場合は体験入学時における「体験乗馬」の講座、金沢二水の場合は「二水祭」において実際の馬を用いて馬術部の存在を地域にアピールしている。また、県馬事公苑で開催される各種の大会においてジュニア選手（少年団員とクレイン会員）を積極的に勧誘していることが功を奏したと思われる。しかしこの程度の取り組みでは毎年確実に部員を確保し、今後より一層の活性化を実現するのは困難である。前述の高知県立幡多農業高校を単純にそのまま模倣するには無理があるが、休日に少年団員と交流の機会を設けたり、活動の内容をもっと積極的に外部に発信していく必要があると思う。要はアピール不足なのである。

（４） 課題

馬術には馬と馬場、厩舎や洗い場等の設備が不可欠であり、それには広大な敷地が必要となる。もし仮に場所が確保されても維持と管理に膨大な手間がかかる。また、道具も高価である。それが日本において馬術が普及しない最大の原因であろう。現在、当専門部は金沢二水、金沢向陽の２校に個人参加の星稜を含めた３校で大会運営を行っている。練習場所は金沢二水と金沢向陽が県馬事公苑、星稜がクレインである。練習場所までの移動に要する時間や、練習開始時刻の現状は金沢向陽が最も恵まれていて自転車で 10 分弱なのに対し、金沢二水は顧問の運転による公用車での移動であり、７限終了後の影響もあって練習開始時刻が５時半を過ぎている。金沢大学馬術部が角間に移転する以前は金沢市平和町の陸上自衛隊駐屯地前の馬場（現附属小学校）で練習していたことを思うと距離的にも時間的にも大きなハンデを背負っていると言わざるを得ない。いっぽう星稜はクレインの会員であるため１度乗るたびに事前予約が必要と思われ、部活動のような決まった時間に練習するのは困難であることが予想される。結果として練習時間はかなり制約されるのではなかろうか。

７．まとめ

当競技のようなマイナー競技は知名度が高いメジャー競技とは違い、できるだけ多くの人に魅力を伝えなければいつまで経っても興味を持ってもらえず、ただ縁遠い存在でしかない。油断すると灯が消えかねない危機感を常に持って今後は生徒たちが馬術の虜になるよう、より魅力的な環境づくりに努めたい。

「トップへの挑戦」
～速さを考えた一貫性のある指導体制～

石川県高校体育連盟スキー専門部
鶴来高等学校　　櫻井　外郷

１．近年の全国大会戦績

次の表は３０年ちかくのインターハイ、高校選抜大会の本県選手の戦績です。以前（私たちの高校時代）は、一桁に入賞するのは滅多にないことでしたが、近年は少しずつではありますが、一桁入賞ができるようになってきました。特に３月に行われる高校選抜大会は優勝も含め良い成績を残せています。３月はシーズンも後半でシーズンインの遅い本県の選手にとっては練習を十分につんで望めるせいかもしれません。

インターハイ、高校選抜大会 石川県選手の戦績

	男子アルペン	女子アルペン	高校選抜アルペン	男子ノルディック
昭和５３年度		８位　石川真理子		
１４年間入賞者なし				
平成５年度	SL７位　山口浩二			
７年間入賞者なし				
平成１２年度	SL３位　梶　悠亮		SG１位 SL３位　梶　悠亮 GS６位	
平成１３年度	GS１位　梶　悠亮 SL３位　梶　悠亮 GS８位　瀬川修司		SG４位 SL３位　瀬川修司 GS８位	F　３位 CC１０位　山本直人
平成１４年度	GS６位　梶　博人	GS６位　中村　歩		CC１０位　山下直哉 ﾘﾚｰ９位　鶴来高校
平成１５年度	入賞者なし			
平成１６年度		GS５位　中村　歩		
平成１７年度		SL８位　直江美沙	GS１位　直江美沙	
平成１８年度		SL８位　直江美沙	SG８位　松下みなと GS８位　山下千奈未 GS９位　松下みなと	
平成１９年度			SG３位　山下千奈未 SG４位　松下みなと SL３位　松下みなと GS６位　松下みなと	
平成２０年度	SL７位　谷口勇翔	GS１０位　山下千奈未	SG５位　谷口勇翔 SL７位　谷口勇翔 SL７位　石川千尋	ﾘﾚｰ8位　鶴来高校
平成２１年度	SL７位　谷口勇翔	SL９位　石川千尋	SL４位　石川千尋 GS９位　西　正貴 GS８位　石川千尋	ﾘﾚｰ10位　鶴来高校
平成２２年度		SL４位　石川千尋	震災のため競技中止	F ６位 F２位（選）　永井俊郎 CC７位（選）
平成２３年度				ｺﾝﾊﾞ8位　小柳栄太郎
平成２４年度				F　５位　山口敦史
平成２５年度			SG４位　織田栞 GS４位　森田昂也	

正確ではないかもしれませんが、現在手持ちの資料から石川県選手の入賞は、平成１３年（１２年度）に梶　悠亮選手（鶴来高校）が妙高インターハイでＳＬ３位に入賞する以前は、私と同じ年代の石川真理子選手（県立工業）の秋田花輪インターハイＧＳ８位と、現星稜高校スキー部顧問の山口浩二選手の片品インターハイＳＬ７位の二人しかいなかったのではないかと思います。石川真理子選手以前は正確な資料が、手元になくわかりませんが、石川選手が初めて入賞してから１４年間入賞者がなく、次の山口選手が入賞してから７年間入賞者のない中での梶選手の入賞でした。平成１３年の梶選手の入賞以来　翌年のインターハイ優勝を始め、直江美沙選手の高校選抜大会優勝や山下千奈未選手の３位入賞、松下みなと選手の総合優勝など毎年ではありませせんが、コンスタントに戦える選手を出すことができるようになりました。中学生の成績では石川晴菜選手、そして小山洋平選手が全中大会優勝という戦績も残すことができました。二人は残念ながら北海道の高校へ進学しましたが、少ない選手をしっかりと育てていく土台は何とか保ちながら育成することができた成果とおもっています。入賞者を出せなかった本県から戦える選手を出せるようになったのは、本県開催の全国中学校スキー大会がきっかけでした。

２．全国中学校スキー大会開催から一貫性のある指導体制を目指して

はじめに、専門部の発表内容としてはスキー競技全体のことをあげていかなくてはならないところですが、ノルディック競技とアルペン競技の特性があまりにも違うため、私の専門であるアルペン競技の内容に偏ることをご了承ください。私が高体連の一員として鶴来高校の顧問を始めた２０年前は、インターハイでは全く歯が立ちませんでした。このときすでに石川県での全国中学校スキー大会開催が決まっており地元初の全国大会で入賞ができるように、当時のスタッフで強化の体制を見直しました。小学校高学年の選手から大会開催年の年齢を見据えて選手を選考し、５年計画で選手強化を始めました。そのなかに当時５年生だった梶悠亮選手も入っていました。スタッフでいろいろ考えながら、かなり大がかりな強化事業を組んで行きました。その中には夏休みの海外遠征や、全中大会開催前年と当年は１１月にもいろいろな協力を得てカナダ遠征も実施しました。こういった取り組みの中、当時の全中大会の強化担当コーチを中心にスキーの速さはどこから来るのかという一番大切な技術理論でありながら、自分も含めて本県のコーチが十分理解していたかどうかはわからない技術指導のあり方を具体化できたことがとても大きな財産になりました。スキーはスタートからゴールまでをいかに速く滑り降りるかという競技です。「いかに下向きに力を有効に使うか、いかにスキーという道具特有のしなりやサイドカーブを使うか、いかにスタートからゴールまで減速をしないでスピードをつないでいくか」こういったところがスキーというスポーツの技術の基本になっています。次のページの図を参考にしてください

少し専門的になりますが、図Ａは、斜面に対してエッヂをたて下に落ちないようにしています。図Ｂは、斜面に対して飛び込むように体を下の方に持って行き重力の方向に近い方向に力をつかっています。他にいろいろな要素はありますが、図Ｂのように下向きの力、抵抗の少ないエッジングを有効に使うことができれば、抵抗が少なく速さを生む基本的な要素となります。こういった技術のポイントをコーチ間で共有し、年代ごとに押さえながら指導する形をとれるようになったことが、現状の成績を出すことができる要因になっていると感じています。他競技でもそうだと思いますが、ジュニアでの強化なくして高校生の強化はスキー競技では成り立ちません。今私たちの考える強化の体制は、中学生期までにしっかりと具体化した速さの基本動作を身につけ、高校生の時期はさらにレベルの高い斜面やコースの中でトレーニングを積みながら、試合に臨むことができる環境を整え、体づくりや技術の精度を上げていくことがよい体制と考えます。

ご存じのとおりスキー競技は雪の上でなければ練習ができません。このため練習環境を整えていくためには長期の遠征練習がどうして必要になります。このあたりは学校の活動とのバランスを考えながら活動していかなくてはなりませんが、冬期間は試合が続き学校に行けない状態が続くことも事実です。

図 A

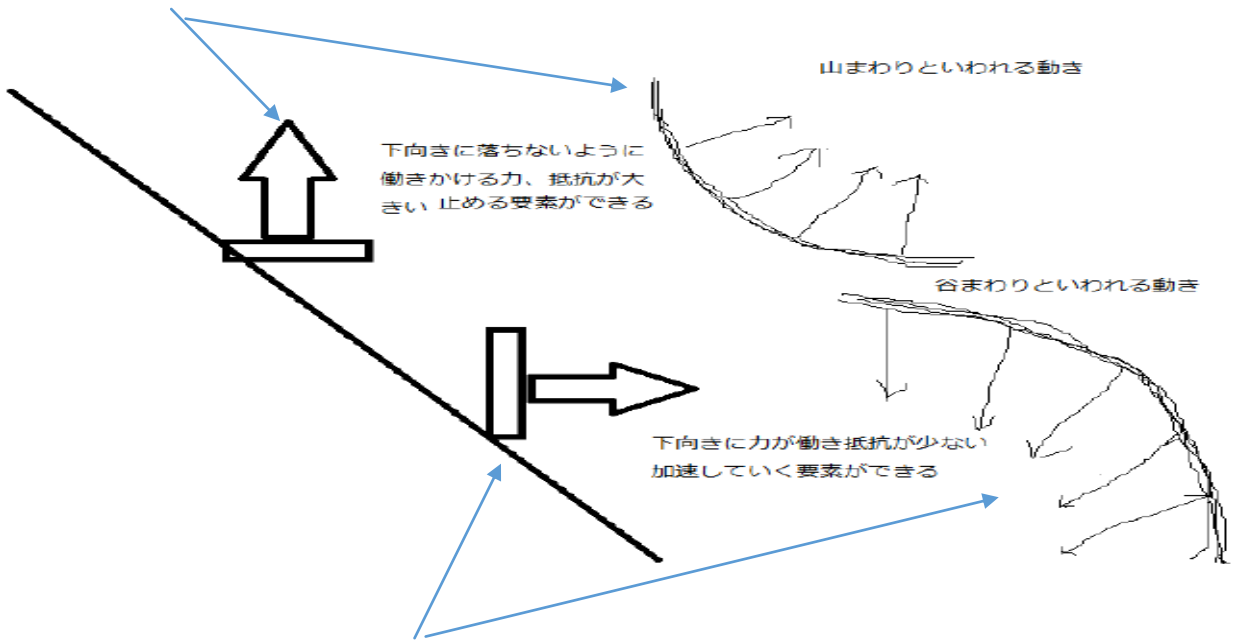


図 B

北海道や長野県、新潟県といった強豪県では強化体制の見直しのなかで近年は１１月から中学生を含めた中国遠征を行うなど、さらに早い時期とジュニア段階からの計画的な雪上トレーニングを行うようになっており、ここ２～３年で中学生などの選手の台頭が見られます。また、強い相手とやらなければ強くならないように、難度の高い斜面や固い雪質の中でのトレーニングも不可欠です。練習環境を求めていくと、費用的な面、時間的な面で非常に厳しいスポーツです。そのせいもあり近年の選手数が減少してきていることも否めません。強化と普及の両輪で進めていきたいところですが、選手の普及活動まで手の届いていないのが現状です。強化活動については、少ないスタッフではありますが、重点強化校を中心に１２月～３月まで様々なレースに選手を参加させる体制を作らせていただいています。インターハイ予選、国体予選、インターハイ、国体、高校選抜大会、全日本選手権やジュニア選手権大会などが２ヶ月半の中に集約されており、さらにランキングポイントを取得する公認レース等にも参加していかなくては、スタート順がタイムに影響するスキー競技では戦いきれません。高校生の強化対策としては、こういった大会にしっかりとトレーニングをつんで参加させることができる環境作り、さらにシーズンを長くとれるようしていく遠征活動なども視野に入れていく必要があります。学校の活動とはかけ離れているところもあり、難しい面もありますがこういった冬季競技特有の面を理解していただきながら、体制としての強化を続けていかなくては、毎年継続して選手を育てていくことができず、先細りになってしまうと思います。他競技でも同じことがいえると思いますが、石川選手・小山選手といった本県にもいる才能ある選手を地元の選手として強化していくために、大きな体制としてのサポート環境は必要なことと考えます。本県から有望な選手が県外に出て行く現状がありますが、指導者としてますます力をつけることも含め、費用的な面、人的な面、施設の面など全体でどうやってこういった選手をサポートしていくのか考えていかなくてはならないと思います。

これからシーズンにはいりますが、昨シーズンに続いて全国大会での入賞そして優勝をめざして有効なトレーニングを行っていきたいと思います。また、厳しいスタッフの人数ではありますが各地区のジュニアクラブなどと協力しながら、地元の練習環境のなかで選手の普及にも目を配り、本県の高校生のスキー競技力の向上に努力していきたいと思います。

「ライフル射撃の発展と競技力向上のために」

ライフル射撃専門部
金沢辰巳丘高等学校　田村　達

１．はじめに

みなさんは、「ライフル射撃」と聞くと、どの様なイメージを持たれるでしょうか。「私はライフル射撃をしています」と言うと、「あの皿を撃つやつね」とクレー射撃と混同している人も沢山いますし、多くの方は大概、「戦争の道具」「サバイバルゲーム」などと、あまり良いイメージを持つ人は少ないと思います。たしかにメディアでは時々「銃を乱射して何人が殺された」とか銃を持った兵士が応戦し銃を撃っている映像などもあり、銃による事件や事故があるものも確かです。ですが、決して銃や射撃そのものが危険なのではありません。銃を扱う人間に問題があるのです。

今回はこの発表を通じてみなさんにライフル射撃競技の難しさや楽しさと同時に、今現在高校射撃界が抱えている問題などを知って頂けたらと思います。

２．競技の説明

（１）ライフル射撃競技とは

ライフル射撃競技は、ライフル種目とピストル種目があり、固定された標的に対して規定弾数射撃し点数を競う競技です。点数は的の中心に近いほど高く、そのため中心に当て続けるための集中力と精神力が必要となります。大会では本戦の上位８名が「ファイナル」（決勝戦）に進出します。決勝では本戦での点数がリセットされ０点からのスタートとなり、ステージ毎に全員の点数（１点を 10 等分し小数点で計算。例 10 点の場合、10.0～10.9 点）が発表され、しかも順位の入れ替わりと点差が全員にわかり、後半からはそれまでの合計得点の最下位の選手が負け抜けとなります。最後の一発の微少の差で勝敗が分かれますので、選手には大きなプレッシャーの中でも自分をコントロールでき、孤独な戦いに耐えうる強靭な精神力が要求されます。

（２）競技種目（高校生対象に実施している種目）

①エアライフル（ＡＲ）競技　・・ 空気を圧縮し、その力を利用して鉛弾を発射する。

②ビームライフル（ＢＲ）競技・・カメラのフラッシュのように銃口が光り、10m先のセンサーが感知し座標軸に合わせて点数と着弾を表示する。

③ビームピストル（ＢＰ）競技・・銃の先から赤外線を放出し 10m先のセンサーが感知し、パソコン画面に銃口の動きと着弾を表示する。(国民体育大会と全国選抜大会のみ実施)

④エアピストル（ＡＰ）競技　・・ＡＲ同様空気の力で鉛弾を発射する。(国民体育大会でも全国選抜大会でも実施されていない。)

銃種	標的まで距離	標的の大きさ	種　　目	満　　点	競技時間
ＡＲ	10m	直径 4.5ｃｍ	立射 60 発 (男子)	654 点 (小数点)	90 分(電子標的 75 分)
			立射 40 発 (女子)	436 点 (小数点)	60 分(電子標的 50 分)
ＢＲ			立射 60 発 (男子)	654 点 (小数点)	45 分
			立射 40 発 (女子)	436 点 (小数点)	30 分
ＢＰ		直径 11.5ｃｍ	40 発（男女同じ）	400 点（整数）	45 分
ＡＰ			60 発（男子）	400 点（整数）	90 分
			40 発（女子）	400 点（整数）	60 分

３．競技人口

ライフル射撃は、第１回のアテネオリンピックから採用されていることもあり、世界での競技人口は陸上や水泳に次ぐ競技人口と言われています。ただし、日本では極端に少なく、一般･学生･生徒をあわせても約 7000 名程度しかいません。その中で高校生の全国登録者数は約 1800 名で、日本全体の 25％近くを占めています。ただし、ほとんどの高校生が高校に入ってから射撃を始め、高校を卒業と同時に辞めてしまう場合が多いため、競技人口は余り増えていかないのが現状です。石川県の状況を説明しますと、県内には４校に射撃部が設置されています。右の表の通り、毎年 60 名程度の登録数であるものの大学に進学し、射撃を続ける生徒はごくわずかです。また、射撃と聞くと、どうしても「危険」であったり「マニアな人が多そう」などのイメージが先行してしまい、女子生徒が敬遠し入部しない。入部しても数名と言うのが現実です。その結果、団体を組めない種目があったり、国体では少年女子の種目が３種目あるため、限られた人間の中から３名の選手を選考しなければならないという問題もあり、人選には毎年苦労しています。

年	県高校登録数（人）			高校卒業後も続けている生徒
	全体	男	女	
H19	72	53	19	3
H20	62	57	5	1
H21	55	49	6	2
H22	57	47	10	2
H23	57	42	15	1
H24	71	52	19	3
H25	62	47	15	2
H26	63	53	10	３（予）

４．ライフル射撃協会との連携

（１）石川県ライフル射撃協会との連携

現在ある４校の射撃部は、平日は学校内でビームライフルを行い、土日は一部の生徒のみ医王山ライフル射撃場にてエアライフルを行っていますが、高校生の競技力向上を語る上で、県ライフル射撃協会のバックアップは必要不可欠なものです。なぜならば、ビームライフルの機材のほとんどは県協会から借りています。また射撃部の顧問の中でライフル射撃の専門的知識と技術を持った指導者は１人（講師を含めると２人）しかいないのです。石川県の競技力向上を考えた場合、一校を特化して強化する方法もありますが、やはり全体的な強化、つまり残り３校のレベルアップが重要となります。そのため、県ライフル射撃協会は毎年５月・８月・12 月・３月に２泊３日の高校生を対象とした強化合宿を医王山スポーツセンター（医王山ライフル射撃場併設）で実施し、石川県の高校射撃部の生徒が全員参加することになっています。とくに５月は入部したての１年生も参加し、協会の方が中心となって基礎的な技術指導をしてもらっています。またその強化合宿には中央よりコーチを招聘し、２・３年生を対象により高度な技術指導をしていただいております。さらに、この合宿では学校間の枠を取り払い、他校の生徒に姿勢のアドバイスをしたりアドバイスを受けたりし、「教えることによって学ぶことがある」をモットーに積極的な意見交換がなされています。

（２）日本ライフル射撃協会との連携

東京オリンピックが決定した事により、日本ライフル射撃協会では「メダルポテンシャルアスリート（ＭＰＡ）」部会が発足しました。この部会では現在の中学生・高校生の中で将来有望な選手を各ブロックや中央に集め、合宿を行い、強化を図ると共に、国際大会にも参加させ、国際舞台でも勝てる選手を育て、将来はオリンピックでメダルを取ることを目標として活動しています。現在本県から１名の生徒が日本代表として世界選手権に参加し、その生徒は今後も中央での合宿や国際大会にも参加し、東京オリンピックを目指しています。

（３）他県の取り組み

福岡県では地域タレント発掘・育成事業が行われており、射撃への適性を見出された生徒が高校で射撃を始め国際大会に参加し、ジュニア種目でメダルを獲得している。福井県・富山県・新潟県・岐阜県などの近隣の県では土日に射撃教室を開催し、小中学生に射撃を継続的に体験してもらい大会も開催している。長崎県でも早くから同様の育成事業が行われており、その結果、今年の長崎国体ではビームライフル男子で中学３年生の生徒が優勝しています。

〔写真 1〕中央よりコーチを招聘した県協会の強化合宿

〔写真 2〕北信越ブロックでのピストルのＭＰＡ合宿

５．高校射撃界における課題

（１）銃砲刀剣類所持等取締法

今年の全国高校選手権ではビームライフルでは男女各 30 チームほどの参加が見られたが､エアライフルは男子が 21 チーム、女子においては 15 チームの参加しかありませんでした。これは射撃競技には銃砲刀剣類所持等取締法（銃刀法）による制約が関係しており、平成 21 年に銃刀法が改正され、競技用空気銃（以下空気銃）の所持が厳しいものになった事が原因の一つであると言えます。それまでは指導者所有の空気銃を借りて（鎖などで机に固定）競技を行う（教習銃制度）か、猟銃等講習会を受講し合格した後に自分の空気銃を持ち競技に参加することが可能でしたが、改正後は教習銃制度が廃止され、誰でも簡単に空気銃を撃てなくなりました。そして教習銃の代わりに年少射撃制度が施行されました｡この制度では原則 18 歳までは自分の空気銃を所持することができなくなり、その代わり射撃指導員の資格を持っている顧問（一部では協会員）の年少射撃用空気銃を使用することになりました。しかし、この制度では生徒が資格を所持するために約２万円の費用がかかるだけでなく、資格申請の手続きにも時間がかかるため、大会に間に合わないというケースがあります｡また､年少射撃資格を所持したとしても 18 歳の誕生日を迎えた時点で年少射撃資格の期限が切れてしまい年少銃が使えなくなるため、猟銃等講習会を受験し空気銃を自分で持つか、ビームライフルに移行することになります（実際の所、将来大学に進学し射撃を続けたいという生徒以外はエアライフルを諦めます)。さらに射撃指導員の資格も変わり、年少射撃制度の場合、「その学校の顧問」であると言うことが条件で生徒に資格が得られ、空気銃の使用が認められるため、顧問が異動すると、生徒が年少射撃資格を持っていたとしても年少射撃用競技銃を使えなくなるという問題も起きています。また当然のことながら顧問が病気や不慮の事故等で大会の引率が出来なくなった場合も、生徒は大会に参加することが出来ません。その一方で、国際大会等で活躍できそうな生徒についてはエリート射撃という制度の下、自分の競技銃を所持することが出来ます。しかし、これにも厳しい制約や競技銃とは関係のない猟銃の内容を含めた猟銃等講習会を受講し合格する必要があり、県によっては猟銃等講習会に何度も受けたが合格できず諦めた生徒もいます。

（２）指導者不足

もともと、ライフル射撃という競技は日本ではマイナーな競技である上に競技人口も少なく、部活動も全国で 120 校（個人を含めると 160 校ほど）程度しかありません。しかも大学に進学し教職を取り教員として戻ってくる生徒もごくわずかです。そのため専門的指導者が他校に異動してしまうと、その学校の競技力は年々低下してしまいます。

（３）費用

ライフル射撃という競技は、ある程度までは自力で成績が上がりますが、道具に左右される面も大いにあります。ただ、その道具のほとんどがヨーロッパや韓国などからの輸入品であり、一つ一つが高価なため、入部を諦めてしまった生徒もいます。また空気銃を所持できない生徒が行うビームライフルの機材は、小数点を表示できる機材が大会実施には必須で、ファイナルを行うためには最低でも 8 台が必要なのですが、本県には 5 台しか無く、今現在、石川国体の際にそろえた小数点が表示されない古い機材を用いて試合をしています。そのため満点を出たとしても記録が公認されないという状況になっています。

〔例〕　空気銃（主にドイツ製）・・・約 25 万円～40 万円
射撃用ジャケット・ズボン（主に韓国製・フィンランド製）・・・約 8 万円～15 万円
射撃用シューズ（主にドイツ製）･･･約３万円
ビームライフル銃･･･約 20 万円
ビームライフル標的・表示機材･･･1 セット約 45 万円

６．今後の取り組み（まとめ）

現在、射撃競技では中国や韓国の若い選手が世界大会で活躍しているのを目にします。中国や韓国では 13 歳から空気銃を所持することができ、環境（射撃場・指導者）の整った中でエアライフルとエアピストルに分かれ毎日練習に励んでいます。その一方で、日本のように空気銃を撃つ環境が法律によって制限されている状態では国際舞台に出たとしても、練習量の差・経験の差によって中国や韓国の選手に勝つことは難しいのが現状です。一方で、誰でも競技が出来るようにと開発されたビームライフルにおいても高校を卒業した後の大会がないため射撃を続けていきたい人は、遅かれ早かれ空気銃を所持することになります。どちらにしても、法律という大きな壁が立ちふさがっており、生涯スポーツとして成立しにくい状況があります。

その一方で、射撃競技は運動神経とさほど関連がないため、中学時代吹奏楽部であった生徒が全国で優勝したり、競技を始めてたった数ヶ月で国体に入賞したり、1 年足らずで世界大会に出場したりする選手もおり、射撃競技は育成のしがいのあるスポーツであるとともに、もっと早い段階から育成していけば、中国や韓国の選手に勝てる選手・強い選手を育てることが出来ると考えます。そこで、少年サッカーや少年野球・ミニバスケットボールなどと同様に小・中学生から選手を育成・強化していくことが急務であると同時に、体験教室を開いて多くの方に射撃を体験してもらい、射撃の楽しさや安全性を実感し、射撃競技を続けて貰う必要があると考えます。そのためにも県協会と連携し、メディアと通して射撃競技の普及と底辺の拡大を図ると共に、指導者の育成に努めていきたいと思います。

最後に、私は高校から射撃を始め 25 年経ちます。今現在、射撃部の顧問であり、国体の監督でもありますが、現役選手でもあり試合にも出ています。始めは安易な気持ちで始めた射撃でしたが、今ではその奥深さにどっぷりはまり、職業（趣味）となっています。それだけ難しくもあり楽しくもあり、引きつける何かを持っているのが射撃という競技だと思います。これからも生涯現役をモットーに選手と共に「教え合い学び合い」の精神で選手の育成に励んでいきたいと思います。

平成26年度
第49回全国高等学校体育連盟研究大会開催要項

1　趣　　旨　　公益財団法人全国高等学校体育連盟に加盟する各高等学校体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため，日頃の研究成果を発表するとともに，当面の諸問題について情報を交換し，高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。

2　主　　催　　公益財団法人全国高等学校体育連盟

3　後　　援　　文部科学省　徳島県教育委員会　徳島県高等学校長協会

4　共　　催　　読売新聞社

5　主　　管　　公益財団法人全国高等学校体育連盟研究部　徳島県高等学校体育連盟

6　期　　日　　平成27年1月15日（木）・16日（金）

7　会　　場　　あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）
〒770－0835　徳島市藍場町2丁目14番地
TEL 088－622－8121　　FAX 088－622－8123

8　参 加 者　　各都道府県高等学校体育連盟加盟の体育・スポーツ指導者及び高等学校の部活動に興味関心をもつ指導者・研究者・学生

9　大会主題　　It's time for action.（今こそやるときだ！）
～スポーツがひらく輝く未来～

10　内　　容　　(1)　課題研究
(2)　分科会
第1分科会　「競技力の向上」
第2分科会　「健康と安全」
第3分科会　「部活動の活性化」
(3)　講演：講師　鹿屋体育大学学長　福　永　哲　夫氏
演題：「スポーツパフォーマンスを向上させるための科学的コーチング
―個性を引き出す指導―」

11　日　　程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1月14日						①	②		
1月15日	受付	開会式	全体会（課題研究）	アトラクション	昼食	分　科　会			
1月16日	全体会（分科会報告）		講　演	表　彰 閉会式					

①　分科会発表者・助言者・司会者打合せ会
②　公益財団法人全国高等学校体育連盟研究部委員会

12　表　　彰　　分科会の研究発表の中から，優秀研究について表彰する。

13　分科会の発表申込

分科会の発表申込は，所定の用紙により各都道府県高体連を通じて申し込むこと。
課題研究の発表は別に定める。

(1)　申込期限　　**平成26年8月15日（金）必着**

(2)　申 込 先　　〒770－8064
徳島県徳島市城南町2丁目2番88号
城南高校内　徳島県高等学校体育連盟事務局
第49回全国高等学校体育連盟研究大会徳島県実行委員会会長　宛
TEL　088 － 635 － 2155　　FAX　088 － 635 － 2156
E-mail：info-mail@toku-koutairen.com

(3)　原稿提出期限　　**平成26年9月19日（金）必着**
- 原稿は別添の執筆要項に基づき，横書き（48字×42字）6枚以内とする。
- 補足資料提出がある場合は，700部を発表者が準備する。

(4)　そ の 他　　本大会では，ローテーションで決められた者と公募による者が分科会発表を行う。

14　参加申込

参加申込は，所定の用紙に必要事項を記入の上，参加料を添えて各都道府県高体連で一括して申し込むこと。

(1)　参 加 料　　一人　4,000円

(2)　申込期限　　**平成26年10月24日（金）必着**

(3)　申 込 先　　発表申込先に同じ

(4)　参加料・報告書代　送金先
金融機関：阿波銀行　二軒屋支店
口座番号：普通預金　1211160
名　　義：第49回全国高体連研究大会　実行委員会
会長　天羽　博昭（アモウ　ヒロアキ）

15　宿泊・昼食の申込

宿泊・昼食の斡旋を希望する場合は，所定の用紙に必要事項を記入の上，各都道府県高体連で一括して申し込むこと。

(1)　宿 泊 料　　1人1泊（朝食付き，税・サービス料含む）

①	ホテルサンシャイン徳島	S:6,500円　T:6,000円	②	ホテルサンシャン徳島アネックス	S:7,500円　T:7,000円
③	徳島東急イン	S:8,000円	④	ホテルサンルート徳島	S:9,000円　T:8,500円
⑤	ホテルグランドパレス	S:9,000円　T:8,000円	⑥	アグネスホテル徳島	S:8,000円　T:7,000円
⑦	アグネスプラス	S:8,000円　T:7,000円	⑧	ホテルフォーシーズン徳島	S:7,000円　T:6,000円
⑨	APAホテル徳島駅前	S:6,500円	⑩	東横イン徳島駅前	S:5,900円

(2)　昼　　食　　1,000円（弁当・お茶　税込み）

(3)　申込期限　　**平成26年10月24日（金）必着**

(4)　申 込 先　　㈱近畿日本ツーリスト中国四国　徳島支店　　担当：花野・山田
〒770－0841　徳島市八百屋町1－14　三井生命ビル3F
TEL 088 － 622 － 0985　　FAX 088 － 625 － 4887
E－Mail：hanano050039@kntcs.co.jp

(5)　配　　宿　　11月末までに各都道府県高体連事務局宛に送付する。

16　報告書の購入予約

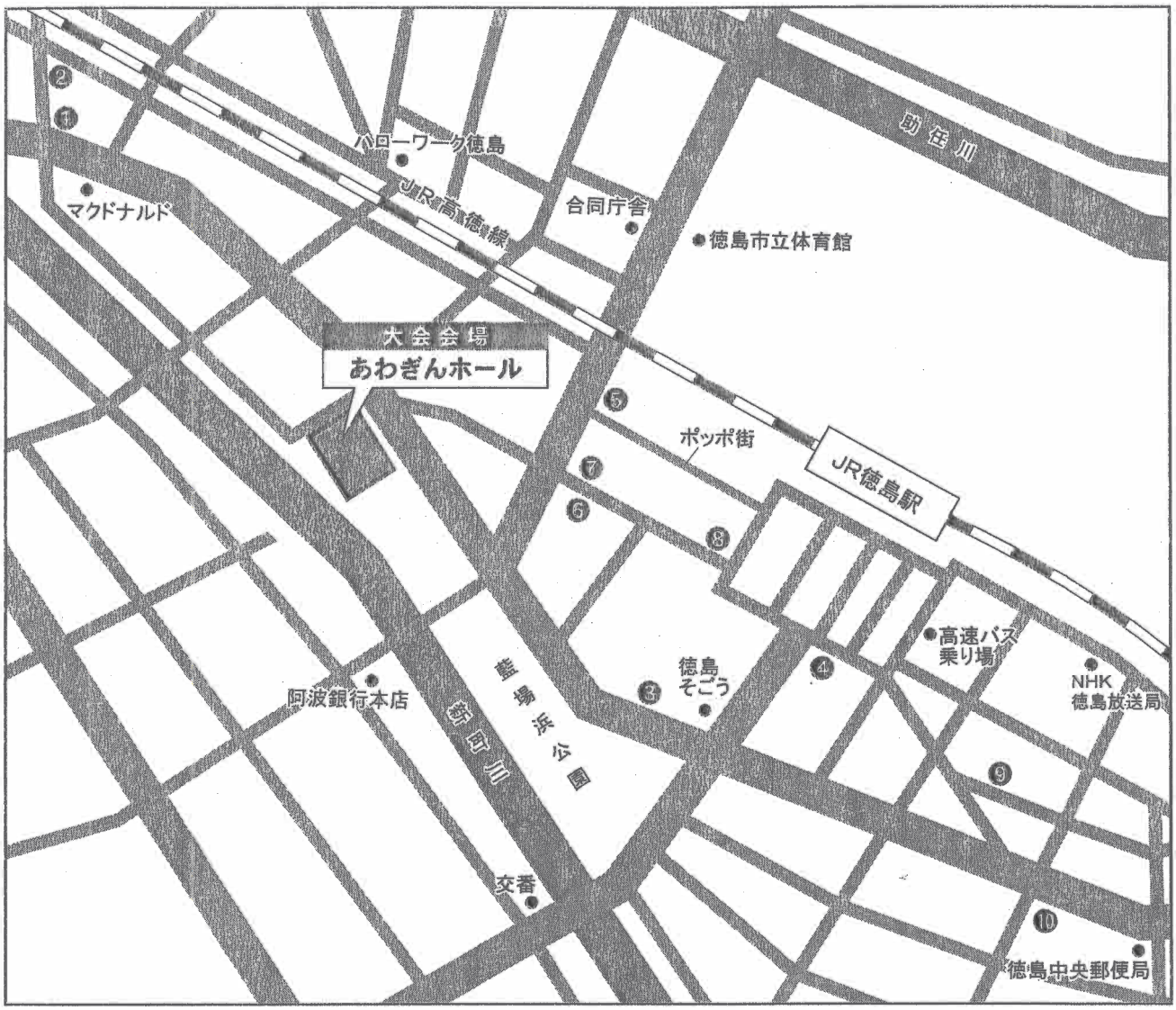
(1)　報告書の購入希望者は，参加申込書の報告欄に部数を記入すること。

(2)　申込期限　　**平成26年10月24日（金）必着**

(3)　申 込 先　　参加申込みに同じ

(4)　報告書代送金先　　参加申込みに同じ（1冊1,000円）

第 49 回全国高等学校体育連盟研究大会
徳島大会会場宿泊案内図



No.	ホテル名	No.	ホテル名
❶	ホテルサンシャイン徳島	❻	アグネスホテル徳島
❷	ホテルサンシャイン徳島アネックス	❼	アグネスプラス
❸	徳島東急イン	❽	ホテルフォーシーズン徳島
❹	ホテルサンルート徳島	❾	APA ホテル徳島駅前
❺	ホテルグランドパレス	❿	東横イン徳島駅前

〔 交 通 案 内 〕

■ＪＲ徳島駅から大会会場まで徒歩 10 分

編　集　後　記

今年も研究紀要を発刊でき、大変うれしく思います。

第８回を迎えた県の研究大会も、皆様のご協力のお陰で成功裏に終わり、ほっと胸をなで下ろしているところです。しかしながら、県高体連・高体連研究委員会としての課題もたくさん残っており、一つずつ課題をクリアし、県高体連・高体連研究委員会が発展するとともに、先生方の指導力向上、生徒の競技力向上につながればと思っております。

また、今年度の全国研究大会徳島大会には、来年度宮城大会の「競技力の向上」分科会で発表予定の、小松商業高校松田岳志先生にも参加してもらいました。全国大会の雰囲気を感じていただき、発表への準備を進めていただきたいと思います。研究委員会といたしましても、全面的にバックアップし、発表が成功裏に終わるよう協力していきたいと考えております。

この研究委員会の現行組織も２年が経ちました。今後益々の県研究大会、研究紀要など委員会の活動、組織を盛り上げていくためにも、皆様からのご意見なども伺いながら、より一層充実したものになるよう活動を続けていきます。

最後になりましたが、関係各機関や調査研究委員の方々にこれまでのお礼と感謝を込めて、編集後記といたします。　　（達　光洋　記）

平成26年度石川県高等学校体育連盟調査研究委員会名簿

	地区	氏名	学校名
部長	副会長	江指　肇	寺井
委員長	副理事長	達　光洋	寺井
副委員長	加賀	元尾　武彦	小松工業
委員	金沢	波佐間　英之	金沢北陵
		千石　友規	金沢伏見
	能登	黒坂　昭弘	七尾
	専門部	車　浩明	金沢向陽
		中川　義之	金沢向陽
		櫻井　外郷	鶴来
		田村　達	金沢辰巳丘
		中村　隆輔	小松大谷
		山岸　亜矢	羽咋
		松田　岳志	小松商業
		西村　剛	津幡